

# 研究所だより

第486号  
2025年6月13日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015

“あめあめ ふれふれ かあさんぐ



じゃのめで おむかえ うれしいな

ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン”



「あめふり」 日本の童謡 1925（大正14）年



～アジサイの花が色鮮やかに咲いています！～

6月8日（日）気象庁は、「四国地方と九州北部が梅雨入りしたとみられる」と発表しました。四国は平年に比べ3日遅く、昨年より9日早いそうです。同日には沖縄地方の梅雨明けが発表され、本格的な夏の始まりとなりました。

各学校では、プール掃除やプール開きが行われ、本格的に水泳の授業が始まりました。これから暑くなってくると川や海へ行く機会が増えてきます。「自分の命は自分で守る」を合い言葉に水難事故防止に努めていただきたいと思います。

「指導と評価」2025.4月号より

協働学習が成り立つ学級集団づくり

授業づくりと学級集団づくりは一体である

早稲田大学教授  
河村 茂雄

## 1 変化の大きい社会で生きていく力とその獲得方法

新たな問題が次々と生起する変化の大きい現代社会では、直面する課題に対して、自分が持つ知識やスキル、価値観などを活用して、適切に対処していく能力が必要とされます。そして、近年重視されている「生きて働く学力」や、問題解決能力である「コンピテンシー（資質・能力）」「自己調整力」「認知・非認知能力」といったものは、いずれも自律的な選択と行動を通して獲得される、思考と情意とが相補的に統合された能力です。

このような社会の状況と求められる能力の特徴を考えますと、私たちはすでに持っている能力を常に更新すべく、生涯にわたって学び続ける「自立した学習者」となることが必要になります。

さらに、学び方についても、個人でこれらの知識や技能を習得していくというよりは、「実践共同体」(Lave, & Wenger, 1991)への参画を通じた体験学習です。実践共同体とは、共通の関心や目標を持つメンバーが、知識や経験を共有し、相互に学び合いながら、その共通の関心事に対する実践的なスキルと知識を向上させる社会的な集団で、その集団での活動体験（役割の変化や過程そのもの）から付随的に暗黙知（その集団に存在する価値観・考え方・行動の仕方、生き方等）も獲得していくのです。

これは、複雑で予測が困難な世界を生き抜くために、生徒たちに必要な力として「OECD 教育2030」が提起した「エージェンシー」（自ら考え、主体的に行動して、責任を持って社会変革を実現していく姿勢・意欲）とつながるもので、エージェンシーの育成でも、社会やコミュニティへの参画を通じて人々や物事、環境がより良いものとなるよう影響を与える、という責任感を持って課題に取り組むことが求められるのです。

## 2 授業づくりと学習集団づくりとの一体化

児童生徒には、彼らが参画する集団での協働学習を通じた学びによって資質・能力を獲得することが期待されます。

自立した学習者を育成するためには、授業は、一定の知識を理解し記憶する場から、学習者が解決すべき課題に向かって自由度の高い思考に基づく試行錯誤を、他者との協働活動を通して体験学習し、資質・能力を自ら獲得とする場へと変化することが求められます。児童生徒のアクティブラーニング、すなわち「主体的・対話的で深い学び」となる授業改善です。

育成すべき資質・能力や授業において児童生徒に期待される学習活動が変化してくれれば、学習環境である学級集団の状態も変化することが必要です。すべての児童生徒が教師から与えられた規律を守って静かにその説明を聞くレベルの状態から、子ども同士が積極的に交流し、建設的な相互作用が活性化するような状態であることが求められるのです。

つまり、授業づくりと学級集団づくりは一体であるだけではなく、学級集団づくりは「主体的・対話的で深い学び」となる授業の必要条件とも言えるのです。現行の学習指導要領で目指されている「個別最適な学びと協働的な学び」も、良好な学級集団でないと成り立ちません。

## 3 求められる学習集団づくりの状態とは？

変化に対処するための問題解決能力である資質・能力を児童生徒に育成する授業を展開するためには、どのような学級集団の状態が期待されるのでしょうか。



協働学習者では「会話」だけでなく、価値観を共有していない相手であっても「対話」できることが必要です。「会話」と「対話」の違いを簡単に言えば、「会話」は価値観を共有する仲間との交流を指します。仲が深まり関係は安定しますが、創造的なものは生まれにくいのです。一方、「対話」は仲間以外の他者との相互理解を目指して行われるもので、そのためには仲間だけに通じる価値観や言葉だけを使用した主観的な交流では

不十分であり、客観的な証拠に基づき筋道を立てて話し、聞くことが前提です。このような交流から、予定調和的な帰結を超えた創造的な知見が生まれるのです。変化の時代に「自立した学習者」を育成していくためには、協働学習における話し合いに「対話」が不可欠なのです。

そして、所属する児童生徒同士がお互いの多様性を尊重・受容し合って、共通の目的の達成のために、ポジティブな面だけではなく、もっと良くなるために改善すべきネガティブな指摘も含めて、自分の考え方や思いを率直に言い合えることが大事なのです。

これができるためには、所属する児童生徒同士の人間関係には不安がなく、周りのメンバーたちに気兼ねすることもなく、率直に自分らしく接することができる関係性が構築されていることが不可欠です。他の児童生徒と意見が違っても、自分の意見を率直に言えるのは、このような議論が新たなより良い意見・考えの創造につながると信じられるからです。学級内の児童生徒同士に強い信頼関係があるからです。

このような状況を組織心理学の領域では「心理的安全性」が高いと言います。心理的安全性とは「チームの他のメンバーが自分の発言を拒絶したり、罰したりしないと確信できる状態」です(Edmondson, 1999)。これが児童生徒の資質・能力を育成する授業の基盤となる学級集団の状態として必要不可欠なのです。

## 4 求められる学習集団づくりの構造—安定度と活性度—

多くの問題が山積している現在の日本の学校現場において、それらを生起させている基底要因の一つに、児童生徒たちが所属する学級集団の状態の心理的安全性が低くなっている面があることを、筆者は強調したいと思います。それが「主体的・対話的で深い学び」を目指す授業改善の推進を妨げているだけではなく、11年間連続で過去最多になった不登校児童生徒数の増加の背景にあると考えられます（不登校問題は後で説明します）。

そのため、教師が協働学習の場を設定しても、児童生徒は不安を持ち、率直に自分の考え方や意見を発表しないばかりか、そのような場への参加を忌避するような現状が少なくありません。

つまり、心理的安全性の高い学級集団を育成していくためには、その前提として所属する児童生徒間に親和的で建設的な人間関係を形成することが不可欠なのですが、この取組が不十分な学級がとても多くなっているのです。



これからは、子どもたちの大きな多様性の担保を前提にして、建設的に協働学習し合える学級集団の形成が目指されますが、その取組には大きく二つの面があります。

まず必要条件として、児童生徒の情緒の安定や意欲を喚起・維持する側面である「安定度」の確立です。そして、安定度の確立を基盤として、率直で建設的な思考の交流を支える側面である「活性度」の確立が必要なのです。従来の知識習得型の授業では「安定度」の確立がとても重視されてきましたが、探究学習・協働学習が求められる授業では、さらに、高い「活性度」の確立が求められるのです（河村、2022）。

安定度と活性度には段階があり、それをループリック表にまとめたのが図1（河村、2025）です。協働学習で建設的な相互作用を生む学級集団の状態としては、「安定度」が⑤安定で、「活性度」が⑥創造、④活用のレベルが期待されます。

さらに、「安定度」と「活性度」の確立度とそのバランスを把握することで、各学級集団の状態の特性の理解が明確になってくるのです。

## 5 目標と現状の大きな乖離

変化に対応する問題解決能力である資質・能力を児童生徒に育成する授業を展開するため、文部科学省は、仲間だけと「会話」しかできないレベルから、多様な人々と主体的に協働できるように「対話」を活用した授業改善をすべし、と目標を掲げていますが、学校現場の学級内には、「会話」ができる仲間もつくれない児童生徒がとても増えています。3年間の新型コロナ感染予防の自粛政策を経て、この傾向がより顕著になったと思われます。

2023年度の小学生と中学生の不登校は、どちらも11年連続で増加し、不登校の小中学生の数は、合計で30万人を超えていました（文部科学省、2024）。その統計では、児童生徒たちが不登校にいたる要因はここ数年固定していて、その過半数が「無気力・不安」です。ただ、「無気力・不安」から不登校にいたる背景には複合的な要因が絡み合っているため、「具体的な原因を特定することは難しい」と文部科学省も指摘しており、学校現場でも不登校の子どもの対応・支援に苦慮しています。

このような傾向の心理的特性を持つ現代の子どもたちは、学校や学級集団を「安心できる場所」だとなかなか感じられないのではないでしょうか。自ら価値観を共有する仲間をつくり「会話」をすることにも難しい面あるのです。協働学習に取り組む前提となる安定度の高い学級集団を形成するにも、とても高い壁があるのです。

不安が高まっている児童生徒は、他者から指摘される改善策のアドバイスを、自分に対する非難・攻撃と受け取ることが多いのです。したがって、協働活動・学習を「やってみよう」と児童生徒に動機づける前に、児童生徒が持つ人間関係に対する不安を軽減せることが必要なのです。この取組は、ゼロからではなく、マイナスからのスタートだと思います。

## ＝引用文献＝

- ・河村茂雄（編著）『開かれた協働と学びが加速する教室』図書文化、2022年。
- ・河村茂雄『ピアフィードバックのゼロ段階』図書文化、2025年。
- ・文部科学省「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」2024年。
- ・Edmondson, A. C.(1999)『職場チームにおける心理的安全性と学習行動』行政科学季刊誌、1999年。
- ・Lave, J. & Wenger, E. (1991)（佐伯訳）『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書、1993年

安 定 度	活 性 度
⑤安 定	学級の課題に対して、児童生徒全員がリーダーやフォロワーの役割に柔軟につき、役割遂行することができる。
④固 定	全体行動はできるが、集団主義的な傾向があり、リーダーとフォロワーの役割が固定し、児童生徒の間に序列がある。
③流 動	児童生徒は集団の構成員であるという意識が乏しく、個人の利益が優先され、集団活動での連携が弱く小集団が乱立し、成果もいま一つである。
②不安定	児童生徒は集団の構成員であるという意識が乏しく、かつ、学級内に人間関係の軋轢、小集団対立があり、学級集団としてまとまることができない。
①混 沌	児童生徒は集団への所属意識が薄く、嫌悪感があり、各自が勝手に存在し利己的に活動しているので、集団の体をなしていない。
⑥創造	建設的に相互作用でき、既成の知識を発展させて、新たな発想を生み出せる状態。
④活 用	建設的に相互作用でき、既成の知識や方法に新たなものを加えて、応用できる状態。
③遂 行	教師から与えられた課題を、指示されたとおりに、全体で集団活動が実行できる状態。
②停 滞	学級内の人間関係は不安定で、教師への抵抗から指示されたことを、素直に実行ができない状態。
①不 履 行	学級内の人間関係が悪く、教師の指示に反発し、指示されたとおりには実行しない、集団活動ができない状態。

図1 安定度と活性度の確立の程度（河村、2025）



## ＝令和7年度研究協力校（三崎小学校・清水中学校）の紹介＝

今回は、「三崎小学校」の研究テーマ・概要について紹介します。（申請書より）

### 【三崎小学校】

#### 1. 研究テーマ

地域の特色を生かし『地域との連携・協働』による自立をめざした児童の育成

#### 2. 研究の概要

土佐清水市教育大綱・振興基本計画Ⅳの2つの基本理念達成に向け、目指す人間像の一つである、「しみず（家族・なまこ・ふるさと）を愛し、社会に貢献できる人間」を育成するため、総合的な学習の時間や社会科等の時間を中心としてふるさと学習に取り組み、地域の方との豊かな出会いを通して地域の方のあたたかさや自然を再発見し、児童の自立を目指す。

### 『目標』

- ① 地域の人たちとの交流や自然の中での体験活動を通じて、歴史や課題を理解し故郷を愛する心情を育てる。
- ② 「山・川・海の学習」を通じて地域や文化について学び、理解を深める。
- ③ 森林の持つ意義と大切さを学び、これからの環境について考える。
- ④ ジョン万次郎の生涯を知る。

### 『活動計画』

- ・校内及び周辺の環境整備（上級生・地域の方々・保護者）
- ・シュノーケリング体験（サンゴ生態学習）・川の生物調査・間伐体験・グラスボート乗船・ガイド体験等。学校周辺の海・川・山の学習の一環として体験学習をし、地域の豊かな自然と生き物に触れ環境を大切にしようとする学習（意識化）（高）
- ・潮だまりの観察・貝の学習・海藻の学習・ビーチコーミング・サンゴの学習（中）
- ・夏休み期間中に各地区会で子どもと大人による川清掃等
- ・海洋館見学：海洋生物 生態を学習（全）
- ・田植え（中・高）、稻刈り（中・高）、精米 餅つき大会（全）を通して、食物の恵みや山と川のつながり等を考える。
- ・フィールドワーク…ビニールハウス、土佐食、ケンピ工場等地域の工場や施設の見学や石碑の学習
- ・デイサービスへの訪問。（1年、2年、5年、6年）
- ・高齢者の方への絵手紙の発送（全）
- ・こども民生委員活動（3・4年）
- ・副読本等を活用したジョン万次郎学習の実施（全）



三崎小学校では、研究テーマに「地域の特色を生かし『地域との連携・協働』による自立をめざした児童の育成」を掲げ、活動計画の1つに「田植え、稻刈り、精米、餅つき大会などの体験活動を通して、食物の恵みや山と川のつながり等を考える」と位置付け、全校で取り組んでいます。今年度も4月18日（金）に3～6年生が田植えにチャレンジしました。地域の方から植え方についての説明のあと全員が田んぼに入り、苗を2～3株つまみ、ぬかるみに足を取られながらも上手に植えていました。この日は授業で来校していたALTのHadley先生も挑戦しました。コツを掴むととても楽しそうに植えていました。次は夏の収穫です。